
戦争…そして

梅トマト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦争…そして

【Zマーク】

N2183D

【作者名】

梅トマト

【あらすじ】

過去の大戦争。その十年後の世界。まだ戦争の傷が残る世界で刹
那の運命は！？

第一話

「戦争つて…こんななんですね」「ああ…こんな戦争早く終わらせるんだ。戦争は悲しそうなの」「早く…そうだな」

「早く起きないと遅刻ですよ…？」刹那兄さん…！

「んあ？」

「んあ？じゃありませんー早くしてくださいーー！」

「ああ悪いな綾乃。先に行つてもよかつたんだぜ？」

「兄さんは私が起こさないと遅刻でしょう？」

綾乃。俺の妹。とてもよくできた妹だ。

「早くしてぐださい！本当に遅刻ですよーー？」

「悪いー今着替え終わつた！学校いくぞーー！」

学校。もはや学校であつて学校ではない。

十年前に起こつた大戦争。一度目がないとは限らない。

だから学校では剣術、魔術など対抗しうる力を身につける場所とな

つたのだ。

「兄さんはいつも遅刻ぎりぎりなんですからー。」

「綾乃はいつも余裕だな」

「もちろんですー。どうして兄さんにできないのか不思議ですよ」

学校についてしまった。地獄だ。帰りたい。

「兄さん？まさか帰りたいなんて…？」

「おもってないー。ああ今日もガンバローー！じゃあな綾乃！」

俺は振り向かずに走り出す。

綾乃は怒り出すと怖い。逃げろー逃げろ俺！

「おはよー」「やれこまーす」

「おい刹那！また遅刻ぎりぎりか！？」

「間に合つたんだからいいじゃ ないですか」

席に着く俺。

ああ今日も何もない一日が…

「刹那あ一時間目の剣術実践勝負だあーー！」

ああ急にイベント…

「綾乃ちゃんかけて勝負だあーー！」

「朝からうつるさいぞ？夜鬼。^{ヤト}まあ綾乃を賭けられたら受けのしかな
いー絶対に渡さん！」

「おいおいヤト。お前に勝てるわけないだろ？」

「詩帆やつてみないとわからんぞー！？」

「そんなことよつヤト、刹那トレーニングルーム行くぞ？」

「すー…すー」

「寝てんじゃねえ！..」

バキッ！

いつてえ…詩帆のやつ本氣でやりやがったな…

何度もうりつてもこいとえよ…

「よっしみんな来たかあ？」

「せんせーはやくやるーぜー。今日こそ刹那をぶつ飛ばして綾乃ち
ゃんもひらつこだよー！」

「ヤトこには無理だな。まあいい。みんなそれぞれ実践始めてくれ」

せんせーの企図どときこヤトは刹那に向かい走る。

「刹那あ～覚悟～！」

「遅いなあヤト」

刹那はすでにヤトの後ろにいた。

「なんでお前はそんなこはやいんだよ～

「お前がおせえんだよー」

バキッ！ドカツ！

「せんせーヤトが死んだあ

「せつとけせつとけ」

「お前らひでえよ…」

そんな話をしていると詩帆が近づいてきた。

「おい刹那私の相手をしろ」

「いやだ」

「問答無用！」

「おたすけ～」

刹那は詩帆に追っかけられる。
ちなみに振るっているのは木刀。さすがに真剣はあぶないのでとい
うことだ。

「疲れた」

「綾乃ちゃん。うえ〜ん

「ヤト! うるさい! 刹那本氣で剣を振るわなかつたな?」

なんで詩帆にばれてんだよ!?

「なぜそつ思うのですか?」

「私がお前に勝てるわけないだろ!」

なんだそれ〜! ジャあ挑むな!

「とにかく詩帆次の教科は?」

「歴史」

「おやすみ」

「寝るのな」

バキッ！

時は昼休みの屋上

「めしめし～」

「刹那が元気出るときって、飯時だけよね…」

「詩帆！俺も元気だ！」

「ヤトはどうでもいい」

「ガーン」

イチゴミルク飲みてえなあ
あれつ？

「しまつたあ～！！！」

「なに！？」

「弁当忘れた…」

「兄さん！！」

「うわっ！びっくりした！綾乃かよ」

「兄さんお弁当忘れたでしょ？持ってきてあげましたよ？」
「さすがわが妹～」

そんななかにはいつてくるやつが一人…

「綾乃ちやん」

「あらヤトさん」とちわ

「あじたかつたよお～」

バキッ！ドカッ！ゲシッ！

「こつてえ！せつなあなたにすんだよおー…」

「お前死にたいのか？」

刹那の殺氣はほんものだつた。

当然ヤトは…

「い）めんなさい」

「兄さん何もそこまで…」

「綾乃こいつはほとんやつとかなきやいけないんだよ」

そんな楽しいお昼でした。

帰り道。

「疲れた…」

「お前は一日寝てたようなものじゃないか」「詩帆さん兄さんは一日寝てたのですか？」

「ああそうだ」

「兄さん…わかっていますね？」

「い）めんなさい！」

「あんなにやんなくつてもいいじゃんよ～」
「兄さんがまじめにならないからですー！」

「ここは刹那の家。

喧嘩の声が聞こえる。

「だからそれば～」
「だからじやありませんー！」
「もう綾乃は～。ちょっと出かけてくるわ～」
「ちよっと兄さんー？」

刹那は家をでる。
そこには女が立っていた。

「わるいな。待ったか？柊」
「いいえそんなことないわ。それより妹さん…」
「この人の事ださあいいひげ。遅刻だ」

そうこうと刹那と柊は夜の闇に消えていった。

第一話

「刹那…また遅刻…」

「『めんね。姫』

ここは町外れの森林。

刹那たちが来たときは純白のコートを身に着けた2人が立っていた。

「終は刹那を連れてきたんだよな?」

「刹那は遅刻魔君だからね」

「で?今日の任務は?」

「ああ。やつら…『黒炎の歌』の研究所を見つけた。直ちに向かい破壊する。」

「龍也はまじめ君だなあ。」

「いつも遅刻のお前とは違うのだ。さあいくぞ。場所はここから北に向かえばいざれ見える」

「いざれ見えるつて…もういないし」

「みんな…いつたよ…?い」

「ああ姫。いくか」

「ザツ!」

刹那たちは後を追う。

研究所とは…?そして『黒炎の歌』とは?

「…」

「刹那…いかないと…おいてかれるよ…?」

「そうだな」

そこは人が一人もいないような町外れの倉庫。

ザツ！

刹那たちの後ろから物音がした。

「だれ…？」

「ヒヒを嗅ぎ付けたのはほめてやね。しかしヒヒでねむつーー？」

「おせえ…」

刹那はいつの間にか出てきた男の後ろにまわっていた。
そして男の心臓には純白の剣が突き刺さっていた。

「姫いくぞ。遅いとまた柊達になんか言われる」

「うん…」

そして薄暗い倉庫の中をどんどん進んでいく。

「遅いじゃない刹那」

「色々合つたんだよ！」

「おい静かにしろ。ついたぞ」

そこには大きなコンピューター。そこに一人の男が立っている。
カタカタとコンピューターをいじる音が聞こえる。
そこを物陰に隠れて見物する。

「ゼータ
「N - ロイドの研究だ」

「つー？ あんな物をまだー？」

「柊静かに」

「刹那？」

「龍也いくぞ？ いいな？」

「刹那氣をつける。何があるか分からん」

「刹那…援護…任せて」

「姫まかせた」

刹那は飛び出す。

Z - ロイド。別名侵食型ウイルスZ。そのウイルスは人間に投与すればたちまち体を蝕んでいく。しかし、それと同時に人間離れした身体能力を身につけることができる。

「おいそこまでだぜ」

「だ、誰だ！？」

「名乗るのか？めんべくせあな。純白の風Z - X E E E 刹那」

「純白の風だと！？そうかここもばれたか。だが手遅れだつたな！」

「つるさい。しゃべるやつは長生きしないぞ？」

「ええいおまえがあのX E E E の刹那だとしても関係ないわ！もう

Z - ロイドを侵食させた人間は完成しておるのだ！」

奥にあつた力プセルみたいな物が開く。

そこから出てきたのは紛れもない人間だった。

「それがZ - ロイドを侵食させた人間か。お前ら『黒炎の歌』は何がしたいんだ？」

「いいだろう！教えてやる冥土の土産だ！我らはZ - ロイドを使って反乱を起こすのだ！」

「反乱！？王都に反乱したらどうなるか！？」

「そうだ戦争だ！我らは十年前の大戦争をもう一度起こすのだ！」

「てめえらはどこまで腐ってんだよ！…」

ちょんちょん。

刹那と男の会話をみていた終に姫子きこがつづいてきた。

姫子はいつも刹那が姫と呼んでいる小柄な子だ。

「刹那…怖い…」

「どうしたのかな？刹那たしかに怖いな」

「さあお話は終わりだ！やれ！」

「N-ロイド感染者。」いつもなりたくてなったんじやないよな？」

今樂にしてやる」

刹那に感染者の剣が迫る。わいつきの刹那のスピードを上回るスピードで。

「刹那！危ない！」

「まだいたか！そいつらもまとめてやつてしまえ！」

ザツ！

「ふははっ！もうやつてしまつたのかーはやい…な？」

「無痛の一撃。痛みはないはずだ。ゆっくり休みな…」

「きつ貴様は化け物か！？」

「化け物…か。そうかも知れんな…」

ザシコツ…！」

「姫…？」

「刹那…化け物じゃない…！」

姫子の剣は確実に男の心臓を貫いていた。
姫子は怒っているみたいだった。

「ひめ～怒るなよ～。俺が怒るときがなくなっちゃまつたじゃね～か」

「刹那…大丈夫…？」

「心配するなよ姫。それよりここ爆破して任務完了だよな?・龍也
「ああそだな。もう装置はしかけてある。あとほっこりを出るだけ
だ。いくぞ柊」

「あ? ああ

刹那たちは倉庫を後にする。

「戦争…絶対やらせるわけにはいけないな」
「刹那珍しくまじめだな? どうした?」

「うるさい! 龍也おれは帰つて寝るからな! 明日学校だつてのに…」

「ばいばい…刹那…」

「またな刹那」

「じゃあな姫、柊」

ここは刹那の家。

綾乃是すやすや眠つている。それもそのはず今は3時だ。

「綾乃…おやすみ」

刹那は自分の部屋の布団で眠りにつく。

「ああつかれた…」

第二話

「兄さん……遅刻ですよ……！」

「ん～～あ～～」

刹那は眠い目を擦り、体をのばす。

「兄さん……また朝ごはん食べる暇がないじゃないですか！」

「綾乃是食つたろ？」

「もちろんです！玄関で待つてますのではなく準備をしてください！」

綾乃是部屋をでていく。刹那はだるさうに準備を始める。

「早くしてください……！」

綾乃が叫んでいる。刹那は急ぎ始める。

刹那が起きたのは8時。登校時間は8時20分。家から歩いて10分。やうに準備もろもろ……。つまりいつもきつぱりなのだ。

「悪い。待たせた」

「兄さんぎりぎりです……」

「綾乃走るぞ……！」

刹那は走る。綾乃も走る。

学校に着いたのは8時17分。ぎりぎりだ。

「じゃあ兄さんまた。いいですか？授業は……」

「寝ません！それじゃ……！」

刹那はダッシュで教室にはいる。

「刹那くう～んまだきつぎりかい？」

「ヤトか。朝から元気だな」

「もちろん！大会近いし！」

「大会？ああ。おかしいよな新学年始まって早々にやるとか」

大会。刹那たちが通う学校は5月上旬に大会がある。この大会、全学年参加でシャツフルトーナメントとなつていて、そのため1学年が最高学年の4学年とたなることがあるのだ。ちなみに刹那たちは今3学年。去年は刹那が2位の詩帆が3位だった。おまけで言つとヤトは5位。綾乃が1学年にして4位といつ高成績だった。

「刹那おまえにはまけねえぞ！」

「とりあえず綾乃に勝てるようになつてから言つてくれ。おやすみ」「綾乃ちゃんは魔術が…って寝るのはやつ…」

刹那は眠りについた。そのときにせんせいがはいつてきた。

「お～い今日はうれしい知らせだ～。転校生がきたぞ～しかも可愛い女の子だぞ～」

せんせーの言葉に周りの男子は「俺が貰つた～」とか「お前にはわたらさね～」とか「はやくしてくれ～」とかさわいでいる。刹那はといふと…

「くかーくかー」

寝ていた。

「それじゃ入ってきてくれ
「はい」

その子が入つてきたら周りの男子が「かわいい～」とか「うわ～ウチの学校の女子のなかでうりうりんクダ～」とかわけの分からん事を言つてゐる。

刹那は相変わらずだが。

「姫子^{ヒコ}…です…よろしく…」

とうとう周りの女子までもが騒ぎ出してしまつた。「お人形さんみた～い」とか「ちつちやくつてかわいい～」とかいろいろだ。
刹那は…？

「くかー」
「おい刹那！おきり！転校生だぞ～！」
「ん～。転校生の一人や一人で騒ぐなよヤト」
「おまえも見てみろよ。めつちや可愛いぞ～！」
「ん～つて姫！？」
「あつ…刹那…」

刹那に向けられる殺意が混じつた冷たい視線。
刹那はなるべく気にいふことにしていた。

「姫！？なんで？」
「…いろいろ」
「なんだ刹那と知り合いか？なら隣が開いてるから座れ」

刹那に向けられる殺意の視線。

「おまえら転校生きて浮かれてるのはいいが今日から大会に向けて剣術、魔術の授業増やすからなあ」

「なんだよそれ~」といつこえが教室中に響いた。

「おまえらに意見を言わせるつもりはない。もう少しあと練習場いけ~」

生徒達が移動しだした。刹那は？

「くかー」

「刹那…おきて…」

「くかー」

「キコちゃんこいつは寝たら起きないよ。ソーヴィアトモは詩帆」

「刹那…怒るよ…？」

「姫おはよう！」

「私の出番なくなっちゃった…早くいかないとせんせい怒るわよ~」

「こ~うー~」

こ~じはトレーニングルーム。大会に向けて練習しているクラスがたくさんみれる。

トレーニングルームはかなり広いつくりになっている。この学校は1学年7クラス。全28クラスになっているのだが、このトレーニングルームは10クラスは入る広さになっている。
そりゃ「グランドもあるのだが…。

「兄さん!~」

「綾乃か?おまえのクラスも大会に向けて~ってか?」

「ええまあ…」

「綾乃ちや～ん！」

「ヤト死ぬか？」

刹那の周りには殺気が…

「刹那…あの子…あのときの…？」

「姫そうだよ。」

「あの子…知つているの…？」

「知らない…といふか覚えていないと思つ」

「兄さん？お手合させ願えますか？」

「綾乃ちや～んそれは俺が～」

「じゃあヤトおまえは私とな

「げつ！詩帆かよ」

「兄さん？いいですか？」

「あつ？ああ

トレーニングルーム。特殊な結界が張られていてどれだけ大きな衝撃の魔術でも中に留められる。上級生になると進んでこの一室を借りて魔術の練習をしている。

「では。兄さんおねがいします」

「よろしく

その一人の周囲には練習に来ていた生徒、先生たちが集まっていた。なんでも「去年の2位と4位がやりあつた～！」といううわさで集まつたらしい。

「こきますよ？」

「おう。ってうわ～！」

綾乃は一瞬で刹那の懷に飛び込み一発きめよつとする。しかし刹那の反射神経に阻まれる。

「まだまだ～！」

「綾乃～おちつけ～ってうわーーー！」

綾乃は得意の炎の属性による魔術で攻撃。

「兄さんはまだ魔術が苦手なんて言つて居るのですか！？」

「しかたないだろ～！～！」

そんな戦闘をしているとき姫子の携帯が鳴る。

「龍也…？」

「姫子。感染者が現れた。場所はお前がいる学校から西にいる」

「わかつた…まかせて…」

姫子は携帯をポケットに戻す。
そして刹那に手招きをする。

「姫？なんかあつたのか？」

刹那は姫子の近くにいく。

「刹那…感染者…」

「わかつた」

それだけいうと刹那は綾乃の相手に戻る。

「兄さん？ 戦闘中に観客とお話ですか？ 余裕ですね？」

「綾乃時間がない。ごめんな。また今度ゆっくり相手してやる」

ちなみに試合のルールは簡単。

ブレスレットをする。このブレスレットは大きすぎる衝撃から1回だけ身を守る道具だ。一回耐えたら碎け散る。これを碎けば勝ち。もうひとつは気絶をさせれば勝ち。

「なにをまだ終わっていませんよー！？」

「いいや終わりだ」

刹那は一瞬で綾乃の後ろに回った。

気づくと綾乃のブレスレットは砕けていた。

「兄さん？ 何を？」

「なんも。じゃあまたゆづくつやうひな」

刹那は姫子と一緒に外へ出て行つた。

ちなみに詩帆とヤトの勝負は詩帆の勝ち。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2183d/>

戦争…そして

2011年1月26日07時54分発行